

レベッカ・ブラウン著『体の贈り物』の仕組み

— エイズ文学からグリーフ・ケア文学へ —

教育文化学部欧米文化講座 大西 洋一

The Narrative Organization of *The Gifts of the Body* by Rebecca Brown: From AIDS Literature to Grief Care Literature

ONISHI Yoichi

Abstract

This study is an attempt to analyze the narrative organization of Rebecca Brown's *The Gifts of the Body*, an example of American AIDS literature from the 1990s. Although it seems to be a simple collection of stories woven around a homecare aide and gay people with AIDS, she deliberately and elaborately organizes the stories into a coherent, artistic narrative. A close analysis of its narrative structure helps us understand why it has been received not merely as an AIDS novel, but also as a mainstream fiction that depicts the inevitable grief at a loved one's departure.

Key words: : レベッカ・ブラウン (Rebecca Brown) 『体の贈り物』(*The Gifts of the Body*) 小説構造 (narrative organization) エイズ(AIDS) 同性愛(homosexuality) グリーフ(grief) 悼み(mourning)

1 はじめに——「エイズ文学」と『体の贈り物』、その仕組みの理解へ

レベッカ・ブラウン (Rebecca Brown (1956-)) の『体の贈り物』(*The Gifts of the Body* (1994)) は、アメリカ文学研究者・翻訳家として名高い柴田元幸の翻訳によって日本に紹介され、本国アメリカを凌ぐほどの人気を得た。彼女の作品を数多く翻訳している訳者自身が述べるように (222), 彼女の男女間、もしくは女性間の愛情を幻想的な雰囲気の中に描き出した作品に慣れていた読者は、『体の贈り物』の内容を意外と感じたかもしれない。なぜなら、この小説は、死と向かい合わせて生きているエイズ患者とその家事支援を行うホームケアワーカーとの交流をリアリスティックに描いているからである。

1980年代以降のアメリカにおける「エイズ (AIDS 後天性免疫不全症候群)」の蔓延は、大き

な社会的事件であった。とりわけ重大な打撃を被った、男性同性愛者のコミュニティとエイズ、およびエイズに対する社会的偏見¹との闘いは、文学・演劇・映画など様々なメディアを通じて表現されてきた²。たとえば、1995年頃までに出版されたエイズ文学をジャンル別にまとめている「エイズ文学目録」(“Appendix: Bibliography of AIDS Literature”(Kruger 303-354))を通覧すれば、この深刻な問題に向けられてきた文学的関心の高さと豊かさを理解することができるだろう。

しかしながら、「エイズ文学」の伝統は「ゲイ文学」を中心に発展してきたのであり、その中で『体の贈り物』はあくまで「傍流」である。例を挙げれば、*Encyclopedia of AIDS* の“Literature”の項は、エイズ文学全体の発展を、まずは「ゲイ文学」内部で発達した「エイズ文学」の3世代から解説している。その後で、エイズを扱った「主流

小説 (mainstream novel)」の第1世代として、輸血が原因で娘がエイズを発症するという幸福な家族を襲った悲劇を描いた Alice Hoffman の *At Risk* (1986) (アリス・ホフマン『海辺の家族』(早川書房, 1990年)), 第2世代の「『症例研究』的なリアリズム小説」として『体の贈り物』などを挙げているのである (425)³。

「エイズ」に対する意識が相対的に低く、「エイズ文学」というサブジャンルが浸透していない日本において、『体の贈り物』は「エイズ文学」に限定して受容されることはなかった。それよりも、「主流」の「リアリズム小説」の枠内で、終末期における病人の最期を看取る様を描いた「介護文学」、あるいは「看取りの文学」として主に受け取られてきた⁴。実際、この作品を注意深く読めば、「エイズ」のみならず「普遍的」な「死」の問題を扱った作品として、広範な層に訴えかけるような作品自体の「仕組み」が浮かび上がってくるのであり、そこにこそ、この小説の魅力と特長があると言える。

本論文では、その「仕組み」について考察を行うわけだが、それを始める前に、まず『体の贈り物』の大まかな構成と出版過程を確認しておきたい。*The Gifts of the Body* は「～の贈り物 (The Gift of —)」と名付けられた全部で11の章から構成されているが、もともとは、単行本の第1章となる“The Gift of Sweat”のみが最初に発表されている。原著の「謝辞」(165)にあるように、“The Gift of Sweat”は *Good to Go* (Zero Hour Publications, 1994) が初出であり、その後で他の「贈り物」が書き足された上で、単行本が1994年に刊行されている⁵。

それ故に、この作品はホームケアワーカーとエイズ患者との交流の中で生まれた「贈り物」を集めた「逸話」の集成であると思う読者も多いかもしれない。実際に、各「贈り物」には、章としての番号も付されていないため (すなわち、“1 The Gift of Sweat”, “2 The Gift of Wholeness” のような章構成になっていないということ)、一見すると、プロットが進展していくタイプの作品としての性格が薄いように捉えられる可能性がある⁶。そのためか、ある書評者は次のように語っている。「各章は相互に関連しているが、それぞれ独立した作品として成功しており、短編小説というより

はむしろ詩や手紙に似ている」(Miner 14)。

だが、ひとつひとつ「贈り物」を読み進めていけば容易にわかるように、章を越えて登場する人物が存在している。連続した「贈り物」の中に出てくることはないが、少し離れた別の「贈り物」の中に、以前出ていた人物が、あるいはその人と関係のあった人物がいることに気づくのである。その意味で、ただ単に連続して並べられているだけでなく、相互に関連性を持った短編小説という意味において (すなわち、“linked stories”として)、この小説は「連作短編小説」なのである。

そしてまた、物語はただ並列的に関連しながら語られるだけではない。『体の贈り物』を読み進めていくにつれて分かるのは、「語り手」の「私」を軸として、「私」を巡る人々と彼らの状況が、そして「私」自身が時の経過とともに否応なく変化していき、最後のクライマックスに至っていることである。『体の贈り物』を「朗読から始める「文学」教育」に用いた三田村雅子の言を借りれば、「この作品は短編集ではあるがそれぞれの話題が独立しながら連関していて、最終的には、互いに結びついて、エイズにかかった患者とそれを介護する人間の相互的な関わりを浮かび上がらせる仕組みになっている」(三田村2)。この小説は、平明な語彙と淡々とした語り口のためにシンプルな作りの「記録」作品と捉えられがちであるが、実際は緻密な構成を持つ「文学」である。本稿においては、『体の贈り物』がいわゆる「エイズ文学」であることを越えて「感動」を生む文学的な「仕組み」をできる限り明確に記述してみたい。

2 「私」による二度の「巡回」——「汗の贈り物」から「言葉の贈り物」

先に述べたように、『体の贈り物』はエイズ患者と「語り手」であるホームケアワーカーの交流を中心とした小説であり、原著の裏表紙では以下のように内容を端的に説明している。

The narrator of *The Gifts of the Body* is a home-care worker who assists people with AIDS. From Rick to Mrs. Lindstrom to Marty and Carlos and back again, she takes us on her rounds, telling us their stories as she cooks their meals, cleans their houses, does their laundry, helps them bathe — that is, she does what she can, becoming their

companion in the everyday gestures that sustain life in the face of death. (Back Cover)

引用の第2文では、「リックからリンドストロム夫人、そしてマーティとカルロスのところへ、そして最初に戻ってまた始めからと、語り手は私たちを彼女の巡回に同行させる」と記されているが、ここに名前を記された4名にエド (Ed) を加えれば、「私」が世話をした主要な PWA [Person (or People) with AIDS] が揃うことになる。

さらに、ここで指摘されていることでもう一つ重要なのは、彼女のエイズ患者訪問が「巡回 (round(s))」であるということだ。そのため一度の「巡回」が終われば、さらにもう一回 (and back again) 同じ患者の家を訪問して回るのである。この後で詳述するように、『体の贈り物』の最初の8つの章では、上記の主要患者に対して(基本的に)二度の「巡回」を行っており、それにどのような意味合いがあるのかをここで説明していきたい。

「語り手」である「私」は、“UCS [Urban Community Service]” (5) というエイズ患者専門の支援組織に属するホームケアワーカーとして、PWAのサポートを行っている。UCSが秩序だった大きな組織であることは、第10章「希望の贈り物」において詳しく説明されており、「私」はその一員としてエイズ患者宅に派遣され、要求される「仕事」を黙々と遂行している。各章においては、それぞれ焦点を当てられるエイズ患者がおり、それが第1章「汗 (Sweat)」と第8章「言葉 (Speech)」では Rick, 第2章「充足 (Wholeness)」と第5章「飢え (Hunger)」では Mrs. Lindstrom, 第3章「涙 (Tears)」と第6章「動き (Mobility)」では Ed, そして第4章「肌 (Skin)」と第7章「死 (Death)」は Carlos および Marty (Carlos のボーイフレンド) である (図1 参照)。

この組み合わせからもわかるように、第1章「汗」から第4章「肌」まで、上に挙げた主要エイズ患者を一人ずつ「訪問」して、一巡回が終わる。ちなみに、一度目の「巡回」時の彼女の勤務状況を、第1章から第4章に付された手がかりから再構成すると、末尾に付した図2のようになる⁷。平日の午前中は Mrs. Lindstrom と Rick のケアで埋まっており、恐らく平日の午後の当番として Ed の家には週に何度か訪れていたと思われる (「午

前」同様、さらに他の患者の家を訪れていた可能性もある)。そして、Carlos の家を訪れた時のように、週末にも他の人の代理で仕事を行うこともあったのだろう。大変忙しいスケジュールをこなしながら、「私」が熱心に仕事に取り組んでいたという設定である。

そして、第5章の「飢え」で初めて Connie と Mrs. Lindstrom が再登場する。このあと第8章「言葉」に至るまで、はじめの4章に登場したエイズ患者(またはその友人)が再び中心人物として一人ずつ姿を現し、二度目の「巡回」が完了することになる⁸。(二度の巡回の間の関係については、末尾の図3を参照。)

なぜ他の様々な境遇の患者を新たに訪問するのではなく、前と同じ患者との関係を再び描くのか。二度の「巡回」が生み出す小説上の効果はいったい何か、という疑問が浮かんでくるかもしれないが、答えは自明であろう。きわめて単純なことだが、二度の「巡回」の間には必ずや「時の経過」がある。ホームケアワーカーとエイズ患者、ケアする人とケアされる人という「役割」から始まった関係であるが、ともに過ごす時間が長くなればなるほど、両者の間の感情的な結びつきは当然強くなる。しかし、それと相反するように、時が経つほどエイズ患者は一步一步死へと近づいていく。それが「抑止不可能な伝染 (uncontrollable spread)」と「不可逆的な衰弱 (irreversible decline)」(Kruger 73) をもたらす「エイズ」という「不治の病」の恐ろしさである。第5章からの二度目の「巡回」で事態がさらに悪化していくことを示すかのように、一度目の「巡回」の最後となる第4章の「肌」において、Marty は “Everything's another step.” (42) と述べる。時間が経って生じるあらゆる変化は、Carlos が死にまた一歩近づいたことを示すのであり、Marty 自身もまた、のちにエイズを発症し、死への歩みを始めるのである。

エイズとそれによる死については、記述の仕方と比重において工夫を凝らして表現されている。最初の「汗」では、エイズへの言及はまったくなく、Rick の病気については、元ボーイフレンドの Barry と彼の死の記述から読者は想像するのみである (9-10)。それが、次の「充足」になってはじめて、UCSがエイズ患者のみのケアをしている

ことが分かり (18, 21), 少しずつエイズに関する記述が増えてくる。そして、エイズに関する極めて詳細な「語り手」の説明が挿入されるのが、第8章「言葉」の冒頭である。

When the epidemic started there was a shorter time between when people got sick and when they died. Also when the epidemic started everyone thought it wouldn't last that long because someone would find a cure. So when UCS started they asked you for a six-month commitment because that would usually cover how long your people would stay alive and you could see them through to the end. But the epidemic kept going on. They found meds that could slow the virus or some of the symptoms so people could be alive longer. Then you could get really used to being with them. But nobody found a cure so everyone still died. It just took them longer. (101)

ここでは「疫病」であるエイズについて説明がなされているのだが、「語り手」が強調しているのは、症状を抑える薬が使用されるようになって、確かに患者が長く生き延びるようになったことである。ただし、エイズが死を免れない病気であるのは変わらないため、ある意味においては、死に至る時間が延びただけということになる。その間に、ホームケアワーカーとエイズ患者とは感情的な絆を強く結ぶようになり、実際に亡くなるときにはとても辛いことになるのだ (“... and it was very difficult when they went.” (102))⁹。

実際に、患者の病状の悪化は、それを見守らざるを得ない「私」の精神に大きな影響をもたらすことになる。ゆっくりと死に向かいつつある姿を見送るしかない彼女の徒労感が極度に高まりつつあることは、たとえば、勤務状況のような客観的設定においても明らかである。図2で見たように、最初の巡回時には忙しく立ち働いていた「私」であるが、二度目の「巡回」終了時の勤務状況は、コニーのところだけがレギュラーで、あとは「サブ(代行)」となり (“So I became a sub except for staying the regular aide for Connie.” (106)), キースが亡くなった後はとうとう「サブ」も辞めることになる。

After Keith I stopped subbing. I wasn't consciously thinking about quitting, but I was

acting like it. But I would have felt bad to quit because it would be, for me, like giving up. Although in some ways I think I already had. (132)

次節で詳述する通り、第9章「姿の贈り物」で表される経験を通じて、彼女の精神状態はとうとう「燃え尽き (burnout)」と呼ばれるような状態に陥り、いわば「あきらめて」しまうことになったのだ。

しかし、だからといって、ホームケアワーカーとしての仕事を、エイズ患者との感情的交流を排して、ビジネスライクに行うことは難しい。そしてまた、患者自身も彼らに対してひとかたならぬ思いを抱くこともあるのだ。興味深いことに、「私」の二度の巡回は、第1章「汗」のRickで始まり、第8章「言葉」のRickで終わる。この二つの章のテーマとして特に重要なのは、ホームケアワーカーとエイズ患者との心の結びつきである。「汗」において語られるエピソード（「私」を驚かせようと無理をして二人の好物の「シナモンロール」を買ってきたRickは、そのために病状が悪化して入院を余儀なくされる）は、「私」に対するRickの強い思いを表している。そして「言葉」においては、一人一人の患者にとってホームケアワーカーの存在がどれほど重要なものかを、「私」は患者Mikeと「レギュラー」として彼のケアをしていたRogerとの関係から知る (108-109)。

Mike said, “I miss Roger.” ... Then suddenly I said, “He misses you too, Mike.” “Do you know Roger?” Mike asked, surprised and happy. “Yes,” I lied. ... “You’re very important to Roger ... He really thinks of you a lot.” His face lit up. “Really?” “Yeah,” I said. “... you’re a really important friend to him.” Mike was smiling. “He is to me too,” he said. (108-109)

この経験により、ホスピスに入ってから以来、意識的に疎遠にしていたRickに、「私」は再び向き合うことができるようになり、死を間近にしたRickの “Ngmushu [I miss you].” という言葉に “I miss you too.” と答えられるようになったのだ (113-114)。

紙幅の制限があるためにすべての患者について説明することはできないが、ホームケアワーカー

である「私」は、それぞれのエイズ患者と少しずつ親しくなり、やがて濃密な感情のやり取りが行われる時間を過ごすようになる。その時間が長くなればなるほど、ホームケアワーカーの「私」はエイズ患者との結びつきを強くするが、その時間はまた病気が進行していく時間でもあり、患者は後戻りすることなく死へと一步一步近づいていく。この容赦ない事実を二度の「巡回」が効果的に表しているのである。

3 キリスト教的形象を用いて表された「絶望」の頂点——「姿の贈り物」

「私」と強い絆で結ばれるようになったエイズ患者たち。だが、彼らは一人残らず死への一方通行の道をたどっている。彼らとの交流を二度の「巡回」によって描いた後、第9番目の贈り物として描かれているのが、「姿の贈り物」(The Gift of Sight)である。この「贈り物」は、それまでの章と同様に「語り手」である「私」によるエイズ患者宅訪問を扱っているのだが、これまでのエピソードとは様々な点で様相が異なっている。ここでは、小説全体の転換点であると考えられる「姿の贈り物」について、そのプロット展開上の重要性について詳述してみたい。

はじめに、この「贈り物」の内容を要約すると、以下のようになる。

＜ある日曜日に、「私」は見た目がとても不気味な患者の世話を初めてすることになる。「私」は、この患者の体にできた腫れ物に軟膏を塗らなければならないのだが、怯えてしまう。しかし、次に訪問した時には、自分を奮い立たせ、アフリカでエイズに感染した彼の姿を見ても、気丈に世話をすることができた。そして、3回目に彼の家を訪れた時、彼の死を看取ることになり、「私」は彼の体を抱きかかえ、彼の母親に引き渡す。＞

まず、この章において一番重要なのが、この小説中で初めてエイズ患者の「死」が直接的に描写されるということである。第10章「希望の贈り物」における記述の中に、これまでもマーガレットと「アウトテーク (outtake)」(担当した患者の死に立ち会った時に行わなければならない事務手続きおよび面談)をしていたとあるため、「私」がエイズ患者の死を看取るのは初めてではない(133)。

しかし、前回、彼女は無力感に苛まれ「絶望的な (hopeless)」気持ちになったという表現が出てくる通り、「私」にとってエイズ患者の死に立ち会うというのは、きわめて重大な出来事である。

さらに、「私」が看取るエイズ患者の人物造形が巧みに行われている。彼は、これまでの2回の「巡回」には登場せず、この章で初めて現れ、亡くなるのだが、これまでの患者とは著しく外見が異なっている。“This guy was the scariest to look at. . . I was afraid to touch him. I was afraid to look at him.” (117) と、「私」はまるで弱音を吐くかのように、今回の患者の「彼の病の恐ろしい姿 (the terrible sight of his sickness)」(119) がもたらす恐怖を率直に吐露している。よく知られているように、エイズ発病者は、カポジ肉腫などの皮膚に症状が現れる病気に苦しむことがある。この患者の黒っぽい紫色の腫れ物は全身にあり、“Maybe it was seeing so present, so visible, on the outside, and all the time . . .” (119) と、外面に印されたあまりにもあらわな病の表徴ゆえに「私」は怯えたと言っている。“This guy really looked like the plague” (117) と、直截的に述べているように、エイズという「疫病」の「痕(ステイグマ)」¹⁰を持つ存在として、まさにエイズそのものを体現する存在として、この患者は表象されているのである。

そして、この患者は、しばしばエイズの起源と推定されるアフリカ¹¹でエイズにかかったことが、あとで判明する。肌の色に関する言及はないが、「とても硬くてカールしている毛 (his hair, which was very tight and curly)」(118)、「バネのようにちりちりの黒髪 (his springy black hair)」(122) といった身体的特徴から、アフリカ系アメリカ人と推測されるこの患者は、「自らの故郷に帰るようなものであった (it was like back home)」[「アフリカ行き」で病気にかかったのである (121)]。今なおエイズが猛威を振るう、原初の「起源」の地域における感染は、この患者に一層の象徴性を帯びさせることになると言える。

その意味において、この患者のみが最後の最後まで名前を与えられていないことに注意を向けるべきであろう。臨終の床に至り、「私」は“Keith?” (126) と彼の名を呼ぶが、これまでのエイズ患者とは異なり、その前に彼の名が呼ばれることはない。確かに、訪問回数がまだ少なく(三

回) 付き合いが浅いからとか、「私」がエイズ患者と距離を置きたがっていたからと考えることもできるが、穿った見方をすれば、この患者は「無名」であるからこそ、エイズで死に瀕している無数の患者の代理表象になりうるのではないだろうか。前章において、“... the waiting list [for the rooms of the hospices] kept growing because more people got sick.” (102) と述べているように、ますます多くの人々が病気にかかり、ホスピスに入っては、どんどんと亡くなっていく。このエイズによる死への「長い順番待ちリスト」に名前が記されているのは、これまでの二度の巡回に登場した五人の主要人物だけではない。彼らの背後には、死に瀕した何千何万の「名もない」エイズ患者が存在することを極めて象徴的に表しているのが、この患者なのだと考えられる¹²⁾。

このように、エイズという災厄を一身に引き受けた象徴的存在として「キース」を捉えることが妥当と思われるのは、イエス・キリストの死と重ね合わせて描かれた彼の死の描写の崇高さのためである。

The skin of his face looked very thin. Then luminous, like light was there. There was the sight of something radiant.

He tried to open his mouth but couldn't. He closed his eyes.

I leaned over the bed and took him in my arms. I held him as tenderly as I could.

“Keith,” I said, “your mother is coming. You’ll see your mother soon,” I said, “you’ll see your mother soon.”

I held him and told him again and again. I held him until his mother arrived.

Then I put him in her arms. (126-127)

平易な語彙を使用し、意識的な反復を加えているため、聖書的とも思える簡素な文体によって描かれた臨終の光景から浮かび上がってくるのは、「キース」を抱きかかえた「私」が示す「ピエタ(pietà)」(聖母子像の一種であり、磔刑に処されたイエスの降架後、その亡骸を腕に抱く聖母マリアのモチーフ)の図であり(三田村14)、ここで「彼の病の恐ろしい姿 (the terrible sight of his sickness)」(119)は、光輪が見えるがごとく「何か光り輝くものの姿 (the sight of something

radiant)」に変わるのである¹³⁾。

アフリカという「起源」の地でエイズに感染し、病の「烙印」たる腫れ物が全身を覆うアフリカ系アメリカ人“Keith Williams”(137)の死の描写に、人類の原罪を背負って磔にされたイエスというキリスト教的形象が二重写しになる¹⁴⁾。これにより、「エイズ」という「疫病」の次元は広がり、人類にもたらされた「悲劇」という様相を帯びる。しかしながら、この重大な局面において、「私」はまったく無力であり、目の前の人間を一人たりとも救うことができずに感情をすり減らしては、なすすべなく亡骸を抱きかかえるしかない。ここに至り「私」の「絶望」は頂点に達するのであり、その意味において「姿の贈り物」は小説全体における「負」のクライマックスと言えよう。だがそれは、イエス・キリストの場合と同様に、「希望」へと反転する前の「絶望」なのだ。

4 「希望」を持って「大切な人」の死を「悼む」こと——「希望の贈り物」から「悼みの贈り物」

この小説は、エイズ患者と彼らの世話をするホームケアワーカーの「私」との交流を描いたものとししばしば説明されるが、ストーリーはエイズ患者を中心に進んでいき、肝心の「私」に関する説明や描写はあまり出てこない。しかしながら、エイズに関する説明と同様に、小説が進むにつれて情報が少しずつ明らかにされていき、第10章「希望の贈り物」に至って初めて、「私」と彼女が属する組織“Urban Community Service”に焦点が当てられる。この章で中心となるPWAは、この組織を先頭に立って運営してきたMargaretであり、これまでの魂をすり減らすようなホームケアの経験とMargaretのエイズ発症の知らせにより激動する「私」の様子と感情の変化が事細かに描かれているため、この章は小説全体の主人公である「私」を理解する上で大変重要である。

第10章の内容を、かいつまんで示すと以下のようになる。

＜前章で示されたように、キースの死を契機に「絶望」の極みに陥った「私」であるが、それに追い打ちをかけるように、MargaretがエイズにかかってUCSを去ることが知らされる。ショックを受けた「私」は、Margaret

が参加する最後のものとなるため、これまで足が遠のいていた UCS の月例ミーティングに出向く。そこで Margaret は、自らは望みのない病にかかりながらも、なお「希望」を持つことの重要さを「私」に伝える。>

第10章の中心となるエイズ患者 Margaret は、実は第1章からすでに何度も登場している、小説全体の「主要」登場人物である。「私」が仕事を行う上で、UCS との間をつなぐ要の存在として、Margaret の姿や声や名前は度々出てきている (5-8, 29, 32, 37, 72, 79, 107, 117, 120)。特に、「動きの贈り物」では、彼女が最近外出しがちであること (“... she was out—she seemed to be out a lot these days...” (79)), 「言葉の贈り物」においては、彼女の勤務状態に変化が現れ、マーガレットが多くの仕事を他の人に回し始めていることがわかり (“Margaret seemed to be sloughing a lot of her work off onto Donald these days. I didn’t get it.” (107)), 後のエイズ発症のニュースの「伏線」となる。そしてついに、Donald から Margaret の病気について知らされるのだが、これが「私」自身にとって大変な衝撃であったことは、その後の「私」の様子にうかがえる。「私」は、Connie こと Mrs. Lindstrom の体を抱きしめたまま泣き崩れ、事情を知った Connie に（まるで母親が子供をなだめるように）逆に慰められることになる (135-136)。Margaret のエイズ発病を知った「私」の気持ちは、次のように表現されている。

When you find out someone you know is sick it’s different from someone you know because they are sick. When you find out about someone you’re surprised about, someone you hadn’t ever thought would get it, it’s different from someone you thought would get it. It shouldn’t be that way but it is. Everyone who gets it didn’t have it once, everyone who gets it is a loss. (139)

知らない人がエイズにかかるのと、かかるはずのない知り合いがエイズにかかるのでは、気持ちが違う。違いなど本来あってはならないことであり、どんな人であれ失って辛いのは同じはずなのだが、という内容であり、自分がよく知っている大事な人物がエイズにかかった場合の微妙な気持ちの差異が語られている。

Margaret とのお別れ会を兼ねて開かれた月例ミーティングには、恐らくは「私」と同じ気持ちなのだろう、多くの関係者が集まり、ここで初めて UCS の全体像が見えてくる。80年代に UCS を立ち上げて、85年に亡くなった “Henry Brookman” (143) をはじめとてたくさんの固有名詞が出され、現在ホームケアワーカーを務める人々が顔を出す (図4の「他の登場人物」欄を参照)。これまでは「私」によるエイズとの孤立無援の戦いと思えたかもしれないが、実際は多くの人々からなる組織によって戦いが繰り広げられていたのであり、それは一人一人の患者のケアに関してもあてはまる。たとえば、Ed の世話をしていたのは「私」だけではなく、Todd が午前中に Ed のケアをしていたし、Li-Li はサブとして Carlos の家に行っていたのだ (142)。彼らに共通するのは、エイズやエイズ禍に襲われたゲイ・コミュニティの人々と何らかの関わりを持っていたために (“Everyone had someone” (142)), この支援活動に引き寄せられていたということである。

それは「私」においても同様であり、これまで「私」の実生活に関わる要素はまったく顧みられなかったのだが、この章でかいま見える彼女の私的領域が、彼女が活動に加わるようになった動機を示唆している。UCS に入る前から知り合いだった Denise がここに来ていることを知り、「私」は次のようにエイズで亡くなった人々を思い起こす。“Denise’s husband, Norm, had died in ’85. He was an old friend of my old friend Jim. It blew me away when Jim died.” (147)。この Jim という人物については、上述のわずか二文以外、この小説中には何の言及もない¹⁵。がしかし、彼が「私」にとって、エイズで失った大切な “someone” であり、彼の死がこの活動に取り組むきっかけであったことが容易に想像される。なぜなら、彼女は Jim の死を思い出すことをきっかけに、「突然、私は時間がないという気持ちに襲われた」 (“Suddenly I felt like there wasn’t any time.” (147)) ため、“I’m sorry you’re sick.” (147) と、自分の気持ちを率直に Margaret に伝えているからである。Margaret は、あとどれだけ生きられるかわからないながら、再来年の夏に家族とディズニーランドに行く計画を立てており、それを聞いて当惑する「私」の頬に手をやりながら¹⁶、“You can hope

again.” (148) と言うところで、この章の幕が下りる。

小説全体の構造を末尾の図4に示した通り、この章は「絶望」から「希望」への転換の章、すなわち、「絶望」していた「私」に Margaret が「希望」を持つことの大切さを伝える章、と考えることができる。「希望を持つ」ということについて、上に挙げた以上の具体的な説明はないが、それを物語として描いているのが第11章の「悼みの贈り物」ということになるのであろう。

*

最終章に登場するエイズ患者は、これが四度目の登場となる Connie こと Mrs. Lindstrom である。彼女の家族と「私」が彼女の死を看取り「悼む」様子が、この章のみならず、小説全体のクライマックスとなっている。Connie はもちろんエイズ患者であるが、他の患者とはタイプが異なるため、彼女の人物設定を、この小説が受容される上での「仕組み」および小説が最終的に向かった方向と考えると大変興味深い。

Connie は、この作品のエイズ患者の大半を占める男性同性愛者間の性行為によって感染した男性ではなく、乳ガン手術の際に受けた輸血によって HIV に感染した女性である。郊外に住む典型的なミドルクラスの主婦であり (13)、最初に言及した『海辺の家族 (At Risk)』(1988) における Amanda Farrell のように、「何も悪いことをしていないし、こんな目に遭ういわれはないのに」 (“He [Joe] said his mother had never done anything wrong and didn't deserve it” (59)) エイズになってしまった、「罪のない犠牲者 (innocent victim)」（Kruger 123-141）と呼ばれるタイプに属する¹⁷。

そして、彼女の描写の各所で強調されているのは、Connie の「母親」としての姿である。「飢えの贈り物」における、家族が互いにメープルシロップを贈り合うエピソード (56-57) でも示されるように、Connie は愛情あふれる家族に囲まれた家庭の主婦であり、発病に至っても息子や娘たちに見守られながら最後の日々を過ごしている。それは、臨終の描写でも強調されており、息子の Joe は「彼をこの世に送り出してくれた母がこの世を去る手助けをしていたのだ」 (“He [Joe] was helping her leave the world she'd brought him into.” (162)) とあるように、Connie は「母親」として

見送られているのである¹⁸。

このように Connie は、HIV ウィルスに汚染された血液の輸血によるエイズ感染という「悲劇」に見舞われた「母親」として死を迎え、看取った家族は悲嘆に暮れながら彼女の死を悼むことになる。このように考えると、小説の最後において焦点が当てられているのは、エイズによる死というよりはむしろ、愛する人の死、とりわけ肉親（母）の死をどう受け入れるかということではないかと思われる。すなわち、“grief”（「愛する人との」死別に伴う悲嘆）という問題である。

振り返ってみれば、前章において Margaret の発病によって描き出されたのは、“someone you're surprised about, someone you hadn't ever thought would get it”, すなわち、特別な “someone” のエイズ感染（そして死別）である。必ずや死に至る病であるエイズの場合、患者の死は必定であり、それが愛する人である場合、並々ならぬ悲嘆が生じるのも必定である。したがって、その「死」をどのように受けとめ、どのように「悲嘆」を乗り越えるのかというのは、エイズ文学において、とても大切なテーマである。重要なのは、本作品の終盤において、この問題を「親子」関係（親との死別）という、より一般的な関係へと広げて捉えている点である。

誰もがいつの日か経験する肉親との死別。しかし、Connie の言によれば、その死を嘆き悲しむことは「必要」であり、「悼む」ことができないわけではないのだ。夫 John が同性愛者の息子 Joe と和解せぬままに亡くなってしまったことを指して、彼女は次のように語る。

“It's terrible to die if you're angry with someone, or if you have a misunderstanding. The person left alive feels guilty, and it's hard for them to grieve for the dead person. Grief is necessary. You have to be able to mourn.” (159)

正しく理解し合えていなければ、死に際して悲しむことが困難であり、悼むことができない。逆に言えば、人の死を悼み、悲しむことができるようになるには、相手を深く理解していなければならない。人を理解し、愛しているからこそ、死別に際して悲しむのであり、その意味において「悲嘆」は避けられぬものと考えて死を受け入れ、悼まなければならないのである。

この小説の最終場面では、母コニーの死を看取った息子 Joe と、知らせを聞いて駆けつけた娘 Ingrid による「悼み」が具体的に表されており、前述したように「親」との死別による「悲嘆」、「悼み」が前景化されていると言える。

Joe lifted his head and wailed. The wail was a huge long sound like an animal. Tony bent over to hold Joe more. . . .

After a few seconds Tony looked over at me and we stepped away from the bed.

Ingrid arrived. She stood in the living room door like she was frozen. Tony went over and held her then brought her into the room. . . .

Tony and I went out of the room. We left them with the body and they mourned. (163)

誰もが「母」の「子」である読者一人一人にとって、「母」の死を看取る家族の“grief”を描く結末は切なく辛い。この場面に至って、エイズ発病者の死という「特殊」な死は、(エイズ患者ではあるが「罪のない犠牲者」である)「母」の死という「普遍的」な死に転換されているため、読者は痛切にその悲しみを我がこととして感じることができるのである。したがって、「あたかもそれが物語のそもそもの最終目的地であるかのように、核家族を小説の中心に、小説の最後に再導入する恐れがある」(Brophy 116)と捉える解釈が出てくるのにも一理ある。

しかし、だからといって「同性愛」のテーマが完全に消え失せたわけではない。Connie の死を迎える準備をする周囲の人々の様子や、彼女の死の床の描写において重要なのは、同性愛者の息子 Joe と彼の男性パートナー Tony、そして「私」の存在である。死期が近づいてきた Connie の世話をするために家に戻ってきた Joe が、来たるべき死を受け入れようとする際の苦悩を慰める上で、恋人の Tony が果たした役割は大きい(155)。また、息子 Joe の同性愛を受け入れられなかった夫の John とは異なり、Connie 自身は二人の関係を認めており(153-154)、亡き夫も息子と和解できていたらよかったのにと「私」に語っている(159)。さらに、「同性愛」の重要性を表して一番象徴的なのが、Connie の死を看取る場面である。Connie のベッドを取り囲むように、Joe と Tony と「私」が互いの手を取り合い、まるで儀式のように

Connie と一つの輪を形作る様子は、大変印象深い構図である。

He [Joe] kept looking at her [Connie] as he lifted her right hand in his left and handed it over to me. I took her hand. Then Joe took Tony's right in his left, then Tony reached his free hand across the bed and took mine and we were a circle. (161)

このように、同性愛者たち¹⁹に見守られた中で、Connie は死出の旅路に出るのである。

『体の贈り物』は、エイズ患者とホームケア・ワーカーとの交流という形で始まり、主たる発病者である男性同性愛者とパートナーたちによる闘病の様子が中心に描かれていた。しかし、終盤に至り、エイズ患者の死の問題が取り上げられると、死別による悲嘆という問題がクローズアップされるようになる。愛する人との死別は誰にでも起こりうる出来事であり、とりわけそれが肉親の場合、悲嘆は痛切である。本作品では、それをエイズ患者であり「母親」である Connie を中心に描いているため、エイズや同性愛を扱ったゲイ文学と限定的に捉えられるのではなく、愛する人との死別の悲嘆(グリーフ)を扱った「メインストリーム小説」としても受け取られることが可能になり、広範な人々に訴えかける小説になったと言えるのである。

5 おわりに——レベッカ・ブラウンと「グリーフ・ケア」文学

レベッカ・ブラウンには、その名も「悲しみ(Grief)」という作品がある(『私たちがやったこと(Annie Oakley's Girl)』所収)。亡くなった人を、誰一人行ったことのない外国に旅立った友だちにたとえ、残された人々が、決して戻ることはない友を思う気持ちを描いた小品である。この他にも彼女の作品には、親や愛する人との死別を自伝的または幻想的に描いたものが多い。『体の贈り物』に次いで有名なのが、母親のガン闘病から死に至るまでを描いた実話的小説 *Excerpts from a Family Medical Dictionary* (邦訳『家庭の医学』)。そして、*The End of Youth* (邦訳『若かった日々』)の、特に後半部(「煙草を喫う人たち(The Smokers)」から「そこに(There)」)は、タイトルの通り「若さの終わり」を迎え、親と死に別れたにもかかわらず「人がどれほど長く親の子供であり続けるのか

(how long you stay your parent's child)」(69)を悟り、そこから死について、そして親について振り返った作品群である²⁰。このような「死」や「死」に至る過程、「死別の悲嘆」を扱う彼女の小説は、(前述したように)しばしば「介護文学」あるいは「看取りの文学」と呼ばれ、「デス・エデュケーション(死への準備教育)」や「グリーフ・ケア(死別の悲嘆に対する支援)」と呼ばれる領域で題材として取り上げられることも多い。とりわけ、『体の贈り物』や『家庭の医学』は、作者の実際の体験に基づいて描かれた自伝的要素の強い小説であり、「死」や「死別の悲嘆」を考える上で興味深い素材を提供してくれるものとして大変有益な作品と考えられている(梅谷, Bowman)。

しかし、忘れてならないのは、これまでの小説の「仕組み」の分析でわかるように、『体の贈り物』はノンフィクションではなく、きわめて練り上げられた構成を持つ「文学」作品だということである。読者はこの作品で扱われている、エイズ患者、彼らを支えるホームケア・ワーカー、両者の間の心の交流、(同性)愛、逃れられぬ死、そして死者への悼み、という内容に感銘を覚えるわけだが、ここまで詳述してきた物語の展開を支えるのは、作者レベッカ・ブラウンの巧みな筆さばきであり、細部にまで目が行き届いた緻密な小説構成力である。私たちは語られている「内容」にのみ「感動」すると思われがちだが、それは精緻な「形式」によって支えられているのであり、『体の贈り物』をより深く理解するためには、この作品が技巧(art)を凝らした芸術作品(work of art)であることを知らなければならないのである。

*本稿は、中通高等看護学院において、看護師を目指す学生を対象に行なった「教養教育科目」としての「文学」および「言語と文学」の講義内容をまとめたものである。これまで授業を受講し、有益な示唆を与えてくれた学生の皆さんに感謝する。

注

- 1 1980年代初頭、この病気のハイリスク集団は「4つのH」、すなわち、男性同性愛者(homosexuals)、ヘロイン中毒者(heroin addicts)、血友病患者(hemophiliacs)、ハイチ人(Haitians)であると言われていた。そのため、HIVに汚染された非加熱血液製剤によって感染した血友病患者を除き、この感染症は「不道德」な人々が感染する病気であるとの社会的偏見が生まれた(ギルマン 462, 465)。
- 2 たとえば、映画『フィラデルフィア(Philadelphia)』(1993)やトニー・クシュナー(Tony Kushner)原作の演劇『エンジェルズ・イン・アメリカ(Angels in America)』(1992)が、その代表的な例である。
- 3 もっとも、様々な「エイズ文学」に関する研究書において、エイズで死に行く男性同性愛者の友人を看取った女性同性愛者による記録であるAmy Hoffmanの*Hospital Time*(1997)などと並んで、エイズ患者の闘病記録として『体の贈り物』は必ずといっていいほど言及されているのだが。
- 4 たとえば、医療・看護・福祉の対人援助職に従事しようとする若者のための文学ガイドにおいては、「性」のテーマに関連して『体の贈り物』を、「ガン闘病」に関連して『家庭の医学』を挙げている(梅谷54, 134)。
- 5 邦訳も同様の過程をたどっており、まず、雑誌『オリブ』400号記念号[1999年10月18日号](マガジンハウス)に「汗の贈り物」が掲載され、読者の反響を呼んだ。そして、「充足」から「言葉」までの七つの贈り物が『鳩よ!』(マガジンハウス)に連載(2000年9月号~12月号)されたことが、「訳者あとがき」(225)に記されている(『鳩よ!』では、「連作短篇小説」と銘打って紹介されている)。ちなみに、単行本は2001年2月にマガジンハウスから、文庫本は2004年10月に新潮社から刊行された。なお、*The Gifts of the Body*への言及や引用に関しては、原著のページ数を括弧内に示し、和訳に関しては、柴田元幸訳を参考にさせていただいた。
- 6 本稿では、最終的に小説全体の構造を解明していくことを目的としており、全体における各「贈り物」の位置を簡便に示すため、便宜的に、目次に出てきている順に「第8の「贈り物」」もしくは「第8章」というような記述を行う。
- 7 勤務表を作る上での手がかりとなった箇所は、以下の通りである。Rick—"I went to Rick's every

Tuesday and Thursday morning” (3); Mrs. Lindstrom—
“I went there in the mornings three days a week and
stayed till noon.” (18); Ed— (inferred from the
rebroadcast of the soap opera) “The Young and the
Restless” (25) and “Ed had turned to another soap.”
(29), and “He [Todd] used to be the morning person for
Ed when I was doing afternoons.” (142); Carlos—
“Margaret said she was sorry to call me on a Saturday but
the guy’s regular person couldn’t make it so she needed a
sub and could I help out.” (37)

- 8 この後で3回目(第10章「希望の贈り物」(135-136)),
そして4回目(第11章「悼みの贈り物」)の登場を
果たすのは Mrs. Lindstrom のみであり, この小説に
おける彼女の重要性がうかがえる。
- 9 ここに述べられた感情は, エイズ患者を扱ったレベ
ッカ・ブラウンの *Annie Oakley’s Girl* (邦訳『私た
ちがやったこと』) 所収の中編小説「よき友(A Good
Man)」を思い起こさせる。この作品の中では, 死
を待つだけのエイズ患者ジムの苦悩を, 交通渋滞の
ために渡りたくても渡れず, 横断歩道で長いこと信
号待ちをすることにたとえている(125-127)。
- 10 エイズの隠喩と社会的烙印(スティグマ)および排
除に関しては, スーザン・ソントグ『エイズとその
隠喩』, およびサンダー・L・ギルマン『「性」の表
象』(青土社, 1997)の第11章「エイズのイメージ
新たな世紀末における性と病の表現」を参照。
- 11 エイズの「地理学」に関しては, ギルマン479-489
(アフリカに関しては, 特に482以降)参照。
- 12 AIDS と関わりのある Keith という名の人物として,
たとえば, アメリカの画家キース・ヘリング
(Keith Haring, 1958-1990)がいる。彼自身, エイズ
に感染して亡くなったわけだが, Act Against Aids な
どのエイズ撲滅運動に積極的に関与していた。
- 13 有名な「ピエタ」としては, ミケランジェロ作の
『サン・ピエトロのピエタ』(1498-1500, サン・ピ
エトロ大聖堂)などがある。なお, レベッカ・ブラ
ウンは, 対談の中で「抱擁」について次のように語
っている。「抱擁はキリスト教文化の中では原型的
な仕草です。イエス・キリストが病人を抱擁すると
か, 聖者が病んでいる人を抱き締める, 場合によっ
ては人が怖がって近寄らないようなものを抱擁す
る。」(Brown・柴田・沼野・小野 151)
- 14 レベッカ・ブラウン自身, 対談の中でカトリック教
への興味を明らかにしている。「中世後期のカトリ

ックの歴史と文学に興味があるんですけど, 忘我
状態の聖人たちの多くがヴィジョンを体験してい
るんです。それも全身で。例えば, 十字架に磔になっ
たキリストが見えたり。でも, 見えるだけじゃなく
て, キリストの苦悶が聞こえたり, 傷を感じられた
りするような, ほとんど全身の, 五感を使ったヴィ
ジョンですね。」(Brown・野中202)。この意味にお
いて, 本小説の各「贈り物」には「顕現(epiphany)」
的な瞬間があるという指摘は (Cvetkovich 223), キ
リスト教作家としてのレベッカ・ブラウンを考える
上で重要である。また, 同じようなキリスト教的図
像学がうかがえる箇所としては, 「肌の贈り物」に
おいて「私」がカーロスの足を洗う場面(47)などが
ある。「私」は床にすわり, 水をかけてカーロスの
足を洗うのだが, その様子はキリストの足を涙で濡
らす罪ある女 (Luke 7:38) を思い起こさせる。

- 15 三田村は, 「語られざる「ジム」の死の事実」に,
「私」をエイズのケア・ワーカーに駆り立てていっ
た動機」を見ている。そして「ジム」の死を「語っ
た」作品として, 「よき友(A Good Man)」(*Annie
Oakley’s Girl* (邦訳『私たちがやったこと』) 所収)
に言及している。三田村8および注(9)と注(24)
を参照。
- 16 本稿では詳しく論じることができないが, この小説
において「接触」は随所で出てきており, 大変重要
である。たとえば小野正嗣はレベッカ・ブラウンの
描写における「肌と肌の触れ合い」(148)に着目し,
それを「相手のそばにいて, 相手を受け入れる文章」,
「他者の存在をまるごと受け止めて, 一体になりた
い, 理解し合いたい, そういうある種の欲望が「肌」
を拠点にして, 表現されている」と捉えている。し
かしながら, “shame” という概念を持ちだして, 触
れようとして手を差し伸べているが, ゴム手袋をは
めた手では実際に触れることができないことの「恥」
に, この小説の基本的主題を見て興味深いのが
Jennifer Blair である。Eve Kosovsky Sedgewick の
“shame” という概念を援用した, 彼女の “The
Glove of Shame and the Touch of Rebecca Brown’s *Gifts
of the Body*” を参照。
- 17 医療過誤によってエイズに感染した被害者を「罪の
ない犠牲者 (innocent victim)」と呼ぶことの問題は,
それが暗に, そうではない感染者 (たとえば, 男性
同性愛者の場合) を「罪のある (guilty)」被害者と
想定してしまう点である (Kruger 124-125)。先の引

用の直後に「私」が言うように、誰も悪いことなどしていないし、こんな目に遭ういわれはないはずなのだが（“I told him he'd never done anything wrong either and that nobody deserved it.” (59)）。

- 18 また、「私」と Connie の関係も、しばしば「母子関係」のような様相を示している。「私」が Connie の世話をする時には「母」と「子」の関係は逆転して描かれていたが（すなわち、「私」が「母」のように「子」としての Connie の世話をするような関係）(21-22), 「私」がマーガレットのエイズ発病を知って崩れ落ちた時に、病身ながら「私」を抱きかかえた Connie は「母親」の姿であった (135-136)。
- 19 「私」のセクシュアリティに関する直接的な言及は本文中にはないが、レベッカ・ブラウンの他の自伝的作品の一人称の「語り手」が女性同性愛者である場合は多い。たとえば、「ナンシー・ブース、あなたがどこにいるにせよ (Nancy Booth, Wherever You Are)」(『若かった日々(*The End of Youth*)』所収) など。なお、この「語り手」であるホームケア・ワーカーの性質を、レズビアンにおける“butch”と“femme”の関係になぞらえて説明している批評家もいる (Cvetkovich 224)。
- 20 *The End of Youth* の中間部にある “Nancy Booth, Wherever You Are” と “A Vision” は、レベッカ・ブラウンの作品のもう一つの柱である、女性同性愛に関係する体験が扱われている自伝的作品であり、前注で述べたような「語り手」の性格を考える上で重要である。

参考文献

(1) レベッカ・ブラウンの主要作品

- Brown, Rebecca. *Annie Oakley's Girl*. San Francisco: City Lights, 1993. [レベッカ・ブラウン『私たちがやったこと』(マガジンハウス, 2002; 新潮社, 2008)]
- . *The End of Youth*. San Francisco: City Lights, 2003. [レベッカ・ブラウン『若かった日々』(マガジンハウス, 2004)]
- . *Excerpts from a Family Medical Dictionary*. 2000. London: Granta, 2004. [レベッカ・ブラウン『家庭の医学』(朝日新聞社, 2002; 2006)]
- . *The Gifts of the Body*. New York: HarperCollins, 1994. [レベッカ・ブラウン『体の贈り物』(マガジンハウス, 2001; 新潮社, 2004)]

(2) 二次資料

- 梅谷薫『小説で読む生老病死』(医学書院, 2003)
- サンダー・L・ギルマン (大瀧啓裕 訳)『「性」の表象』(青土社, 1997)
- スーザン・ソントグ (富山太佳夫 訳)『隠喩としての病い エイズとその隠喩』(みすず書房, 1992)
- Rebecca Brown, 柴田元幸, 沼野充義, 小野正嗣「シンポジウム 新しい文学の声」『小説tripper』(2005(春季)): 146-157.
- Rebecca Brown, 野中柊「対談 境目にある文学へ」(来日特集 レベッカ・ブラウンの世界)『新潮』99.3 (2002): 194-207.
- 三田村雅子「朗読から始める「文学」教育：日本語プレゼンテーション演習の試み：レベッカ・ブラウン『体の贈り物』を読む」『フェリス女学院大学文学部紀要』38 (2003): 1-25.

*

- Bowman, Ted. “Literary Resources for Bereavement.” *The Hospice Journal: Physical, Psychological, and Pastoral Care of the Dying* 14.1 (1999): 39-54.
- Blair, Jennifer. “The Glove of Shame and the Touch of Rebecca Brown’s *Gifts of the Body*.” *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 11.4 (2005): 521-45.
- Brophy, Sarah. *Witnessing AIDS: Writing, Testimony, and the Work of Mourning*. Toronto: U of Toronto P, 2004.
- Cvetkovich, Ann. “Chapter 6: Legacies of Trauma, Legacies of Activism: Mourning and Militancy Revisited.” *An Archive of Feelings: Trauma, Sexuality and Lesbian Public Cultures*. Series Q. Durham, NC: Duke UP, 2003. 205-238.
- Hoffman, Alice. *At Risk*. New York: Putnam, 1988. [アリス・ホフマン『海辺の家族』(早川書房, 1990)]
- Hoffman, Amy. *Hospital Time*. Durham, NC: Duke UP, 1997.
- Kruger, Steven F. *AIDS Narratives: Gender and Sexuality, Fiction and Science*. New York: Garland, 1996.
- “Literature.” *Encyclopedia of AIDS: A Social, Political, Cultural, and Scientific Record of the HIV Epidemic*. Ed. Raymond A. Smith. New York: Penguin Books, 2001. 422-428.
- Miner, Valerie. “Review: Connections and Disconnections.” Rev. of *The Gifts of the Body* by Rebecca Brown and *Who Will Run the Frog Hospital?* by Lorrie Moore. *The Women's Review of Books* 12.7 (1995): 14-15.

図 1 : Main PWA Characters in the First 8 Chapters

GIFT	(1) Sweat	(2) Wholeness	(3) Tears	(4) Skin	(5) Hunger	(6) Mobility	(7) Death	(8) Speech
PWA	Rick	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Carlos	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Francis Martin (=Marty)	Rick

Cf.) (9) Sight—[Keith]; (10) Hope—Margaret; (11) Mourning—Mrs. Lindstrom (=Connie)

図 2 : the Work Schedule of the Narrator:
the 1st Round [from (1) "Sweat" to (4) "Skin"]

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Weekend
Morning	Connie	Rick	Connie	Rick	Connie	[Sat.] ↑
Afternoon	←		Ed	→		[Carlos] ↓

図 3 : the Interconnection of the Narrator's Two "Rounds"

The 1st Round

GIFT	(1) Sweat	(2) Wholeness	(3) Tears	(4) Skin
Main PWA Character	Rick	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Carlos

The 2nd Round

GIFT	(5) Hunger	(6) Mobility	(7) Death	(8) Speech
Main PWA Character	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Francis Martin (=Marty)	Rick

passage of time
↓
· progression of AIDS
· the emotional bond strengthened

図 4 : the Narrative Structure of *The Gifts of the Body*

〈Their Fights with AIDS: the 1st Round〉

Gift	Sweat	Wholeness	Tears	Skin
Main PWA Character	Rick	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Carlos
Other Characters	Margaret (UCS) [Barry (his boyfriend)]	[Diane, Ingrid, Joe (her children), John (the late husband), Tony, Miss Kitty (the cat)]	"case manager" [Lee, Margaret]	Margaret, Marty (his boyfriend) [Andy]

〈the 2nd Round〉

Gift	Hunger	Mobility	Death	Speech
Main PWA Character	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Ed	Francis Martin (=Marty)	Rick
Other Characters	the nurse [Joe and Tony, the kids from the Literacy Program, Ingrid and the twins, Diane and Bob and their children, Miss Kitty]	the guys in the hospice, the receptionist [Margaret, "case manager", Donald (assistant)]	Andrew (=Andy), Roy and the residents, [Carlos]	Margaret, Mike, another aide, a woman (of the hospice) [Barry, Roger]

〈DESPAIR〉

Gift	Main PWA Character	Other Characters
Sight	(Keith)	[Margaret], His neice, His mother



〈HOPE〉

Gift	Main PWA Character	Other Characters
Hope	Margaret	Donald, David, Todd, Li-Li, Beth, Denise, Buzz, Mercy, Chad, Randy, Quwami [Henry Brookman, Norm, Jim]



〈MOURNING〉

Gift	Main PWA Character	Other Characters
Mourning	Mrs. Lindstrom (=Connie)	Joe and Tony, Ingrid and the twins, Miss Kitty [Diane and Bob, John]